

2025 年度博士論文（要旨）

認知行動療法における「参加」指向的アプローチに関する研究
—ICF を活用した目標指向的リハビリテーションに基づく支援の展開—

桜美林大学大学院

久保 義郎

目 次

第1章 序論	1
1.1 本研究の視座	1
1.2 認知行動療法の構造と課題	2
1.2.1 問題解決モデルの課題と支援の現状.....	2
1.2.2 「参加」を重視した支援視点の意義.....	3
1.2.3 CBT と「参加」概念の整合性	4
1.3 問題解決モデルと生活モデルの対比.....	4
1.3.1 問題解決モデルの特徴と課題.....	4
1.3.2 生活モデルの構造と展開	5
1.4 目標指向的アプローチ（GOA）の理論的位置づけ	5
1.4.1 GOA の定義と成り立ち	5
1.4.2 GOA の階層構造と心理学的応用.....	6
1.5 ICF の構造と心理学的支援への意義.....	7
1.5.1 ICF の基本構造と特徴.....	7
1.5.2 「参加」と「個人因子」の支援的応用	7
1.6 支援の視点と研究の枠組み	8
第2章 理論的枠組み	10
2.1 ICF の構造と「参加」概念	10
2.1.1 ICF の構造と意義	10
2.1.2 「参加」と「活動」の違い	11
2.1.3 個人因子のうち「価値」の役割	13
2.2 目標指向的アプローチの理論と構造.....	14
2.2.1 上田（1983）から大川（2003）への理論展開と構造化.....	14
2.2.2 生活モデルとしての枠組み	16
2.2.3 ICF と GOA の統合的視点	16
2.3 CBT との整合と補完関係	19
2.3.1 CBT の基本構造と ICF との接続可能性.....	19
2.3.2 CBT と GOA の共通点と相違点	20
2.3.3 CBT の展開としての ACT（価値概念と研究動向）	21
2.3.4 CBT を補完する参加指向的アプローチの2チャンネル構造（概念整理） ..	22
第3章 方法：参加指向的アプローチの構造と研究枠組み	26
3.1 参加指向的アプローチの構造整理	26

3.1.1 参加指向的アプローチの構造と特徴.....	26
3.1.2 CBT と GOA の統合的構成枠組み	28
3.2 面接における目標設定の進め方	29
3.2.1 価値・参加・下位目標の階層構造	29
3.2.2 面接における目標設定のプロセス	30
3.3 本研究の研究構成と適用モデル	31
3.3.1 研究 I ～IVにおける参加指向的アプローチの適用原則	31
3.3.2 各研究の目的と比較構造	32
第4章 研究方法.....	35
4.1 研究デザインと実施方法	35
4.2 対象者の選定基準とデータ収集方法.....	36
4.3 分析方法.....	36
4.3.1 ICF による構造分析.....	37
4.3.2 再帰的テーマ分析	37
4.3.3 分析における透明性	39
4.4 研究における倫理的配慮	39
第5章 参加指向的アプローチの適用事例と分析	40
5.1 研究 I：リハビリテーション領域への適用事例	40
5.1.1 脳外傷の事例 1.....	40
5.1.2 脳外傷の事例 2（他の心理職による実施）	48
5.1.3 脳外傷の事例 3（他の心理職による実施）	52
5.1.4 脳性まひの事例.....	55
5.2 研究 I の考察	59
5.3 研究 II：心理療法領域への適用事例.....	59
5.3.1 不登校・引きこもりの事例 1.....	59
5.3.2 不登校・引きこもりの事例 2.....	65
5.3.3 発達障害・知的障害の事例 1.....	68
5.3.4 発達障害・知的障害の事例 2（母親による実施）	72
5.3.5 発達障害・知的障害の事例 3（担任教師による実施）	76
5.4 研究 I・IIにおける共通の特徴と支援結果の整理.....	80
5.5 研究 II の考察	80
5.6 研究 I・II の総合考察.....	81
第6章 参加指向的アプローチの有効性に関する検討と従来モデルとの比較.....	83
6.1 研究 III：支援結果の比較検討.....	83

6.1.1 参加目標設定の有無と差異（行動変容がみられた事例）	83
6.1.2 本アプローチの適用限界と課題（行動変容がみられなかった事例 1）	90
6.1.3 本アプローチの適用限界と課題（行動変容がみられなかった事例 2）	96
6.1.4 行動変容がみられた事例・みられなかった事例の比較検討	101
6.2 研究Ⅳ：参加指向的アプローチと従来モデルの理論的・実践的比較	101
6.2.1 参加指向的アプローチと問題解決モデルの理論的差異	101
6.2.2 実践事例比較による具体的示唆	102
6.3 参加指向的アプローチにおける効果要因と課題に関する考察	103
6.3.1 価値の明確化と参加目標の具体性の 2 軸による事例の整理	103
6.3.2 価値への問いに対する語りのパターンと 2 軸との対応	104
第 7 章 参加指向的アプローチの理論的再評価	107
7.1 事例分析から得られた知見	107
7.2 GOA の理論的独自性と参加指向的アプローチへの貢献	107
7.2.1 GOA の構造的特徴	107
7.2.2 GOA と参加指向的アプローチの統合的意義	107
7.3 参加指向的アプローチの理論的貢献と実践的意義	107
7.3.1 理論的貢献	107
7.3.2 実践的意義	108
7.4 心理療法の多様性と統合の可能性	108
7.5 価値・参加・活動を基軸とした心理療法の理論的比較	109
7.6 参加指向的アプローチによる心理療法の部分的統合の可能性	112
第 8 章 結論と今後の展望	114
8.1 本研究の理論的総括	114
8.1.1 ICF・GOA・CBT の統合的理解	114
8.1.2 参加指向的アプローチの理論的枠組みと構造	114
8.2 研究Ⅰ～Ⅳから得られた実践的示唆	115
8.2.1 研究Ⅰ～Ⅳから得られた実践結果と展開	115
8.2.2 汎用性と応用の可能性	115
8.3 今後の課題と展望	116
8.3.1 理論的課題（支援構造・分類・測定など）	116
8.3.2 実践的課題と今後の研究の方向性	117
第 9 章 総合的結論	119

引用文献

第1章 序論

本研究は、心理学的支援において、問題解決モデルやその典型例である認知行動療法（Cognitive Behavioral Therapy : CBT）が重要な位置を占めてきたことに着目し、その課題を整理し、「参加」を中核に据えた支援モデルの構築を目的としたものである。問題解決モデルは、症状や不適応状態の改善に焦点を当て、短期的かつ構造化された介入で効果を挙げてきた。しかし、その主な焦点が「症状」や「問題」に置かれるため、クライアントが望む生活や本人にとって意味ある目標の実現といった長期的視点を十分に扱えないという指摘がなされてきた。

一方で、価値を重視する理論の系譜（実存主義・人間性心理学など）は早くから存在してきた。しかし、実践における手続きや評価の水準では、価値や希望を具体的な生活目標や行動、環境調整へと体系的に接続したり、標準化された指標で評価する方法は、十分には一般化されてこなかった。こうした状況により、本人が望む生活上の目標への接続が必ずしも十分ではない場合、必要な行動変容が得られず、支援効果が限定的になる場合がある。

これらの課題を補う視点として、ソーシャルワーク領域で発展した「生活モデル（life model）」がある。このモデルは、環境因子や個人因子を重視し、本人の生活史や価値観を支援の基盤に据えて「どのように生きたいか」という問いを中心に目標設定を行う（Gitterman & Germain, 2008）。生活モデルは、医療モデルと対比され、支援の焦点を疾患や機能障害の改善（問題解決モデルに相当する視点）から、生活のあり方や希望の実現に移す点に特徴がある。心理学的支援においても、この視点は生活全体の中で支援を捉え直す試みとして重要である。

さらに、世界保健機関（WHO, 2001）が提唱した国際生活機能分類（International Classification of Functioning, Disability and Health : ICF）は、「心身機能」「活動」「参加」の3要素に加え、「環境因子」「個人因子」との相互作用を含む生活機能モデルを提示している。特に「参加」は、家庭生活、学業、就労、地域への関与といった生活場面における、本人が望む生活像や価値に基づいた関与を指す。ICFの視点は、評価を疾患や機能障害に限定せず、生活全体の改善や本人が望む参加目標の実現に寄与する目標を明確にする枠組みを提供する。

このICFの枠組みと親和性を持つ理論として、上田（1983, 1992）や大川（2002, 2003）が提唱した「目標指向的アプローチ（Goal-Oriented Approach : GOA）」がある。GOAは、目標指向的リハビリテーションの枠組みから発展したものであり、「参加」を最上位目標として位置づけ、そこから「活動」や「心身機能」を下位目標として階層的に設定する。この考え方は、本人が望む生活像を起点とし、支援計画を逆向きに設計する「逆向き設計（backward design）」の方法論を備えており、生活の再構築を実現するうえで有効とされる。

本研究は、ICFとGOAを理論的基盤とした「参加指向的アプローチ」を提案する。中心的な仮説は、支援の出発点を「価値の明確化」と「参加の実現」に置くことで、クライエン

トが主体的に生活目標を定め、それを支援者と共有したうえで、活動目標を具体化することが、参加の実現に向けた行動変容を促し、生活の質（QOL）の向上にも寄与し得るというものである。たとえ症状が残存していても、本人が望む生活の中で意味ある関与を実現できれば、それが行動変容の強い動機づけとなり得る。

第2章 理論的枠組み

第2章では、本研究の理論的基盤となるICFとGOA、CBTとの関係を整理した。ICFは、健康状態と生活機能（心身機能・活動・参加）、および環境因子・個人因子の相互作用を包括的に捉える枠組みである。このうち「参加」は、本人の希望に根ざした生活場面への関与である（大川, 2002）。

GOAは、目標指向的リハビリテーションの一種だが、その目標設定に本人の「どう生きたいか」という価値を反映させるべきだと論じたのは、砂原（1980）や上田（1983）であった。その後、上田（1992a）と大川（2002, 2003）がこの理念を体系化し、GOAとして整理したものである。GOAでは「参加」を最上位目標として位置づけ、そこから「活動」「心身機能」へと逆向きに展開する階層的な目標設定が行われる。この構造は、本人が望む生活像を出発点とし、支援計画を「逆向き設計（backward design）」の方法論によって構築する点に特徴がある。本人の価値や希望を基盤にした目標設定が、生活の改善や参加の実現に直結することが期待される。

本研究では、このGOAの枠組みを心理学的支援に導入し、参加指向的アプローチとして再構成した。このアプローチは、症状や問題の軽減を一義的な目的とするのではなく、本人の望む生活や意味ある関与を直接の目標として設定する。そのため、CBTの技法を基礎としながらも、その位置づけは「参加目標の達成を支える手段」として再定義される。たとえば、活動レベルではエクスポージャーやオペラント、認知再構成といった技法が活用されるが、それらは本人が望む参加目標の実現に向けた具体的ステップとして用いられる。

このように、ICFの包括的枠組み、GOAの階層的目標設定、CBTの技法的資源を統合することで、症状や問題の軽減を焦点とする支援に加え、本人の価値に根ざした生活の改善と参加の実現を可能にする支援モデルを提示した。なお、本研究では、症状・問題の軽減を主眼とする問題解決的支援を第1チャンネル、価値の明確化を起点として参加目標を具体化し、参加目標の実現に繋がる活動目標と必要な環境調整等を行う支援を第2チャンネルとして位置づけた。両チャンネルは支援目的と文脈に応じて並走可能な枠組みとして整理した。

第3章 方法：参加指向的アプローチの構造と研究枠組み

第3章では、本研究が提案する参加指向的アプローチの構造と研究の具体的枠組みを示した。本アプローチは、ICFおよびGOAの理論的基盤を心理学的支援に導入し、本人の価値観や希望を起点に「参加」を最上位の目標とし、その実現に必要な「活動」などの下位目標を逆向きに階層的に設定する。

参加指向的アプローチでは、クライアントが自らの価値観や希望を明確化し、それを生活における具体的な参加目標へと変換する。この参加目標は、家庭生活、学業、就労、地域での関与など、実生活の文脈に直結するものである。その上で、参加目標の実現に必要な行動目標や活動を逆算的に設定し、具体的な行動計画を構築する。支援者はこの過程で、本人が望む生活像を尊重しつつ、必要に応じて環境調整や行動スキルの習得を支援する。これにより、従来の問題解決モデルが症状や不適応行動の改善を最終目標としてきたのに対し、本人が望む生活を基盤とした行動変容を目指す枠組みが提示される。

本研究では、この参加指向的アプローチを複数の領域にわたり、かつ複数の実施者が適用し、その有効性を検討するために4つの研究（研究Ⅰ～Ⅳ）を設定した。研究Ⅰでは、脳外傷や脳性まひといったリハビリテーション領域の事例を対象に、参加指向的アプローチが復学や就労などの参加目標の実現にどのように寄与するかを検討した。研究Ⅱでは、不登校や引きこもり、発達障害、知的障害のあるクライアントを対象に、本人が望む生活像を明確にし、具体的な行動目標を支援する試みを行った。これらの研究を通じて、参加指向的アプローチが問題解決モデルとは異なる枠組みとして、生活全体の質や実生活への関与にどのように寄与し得るかを検討した。

さらに研究Ⅲでは、価値と参加目標に沿った行動変容がみられた事例とみられなかった事例を比較分析し、参加指向的アプローチにおける目標設定の質や支援構造が効果に及ぼす要因を検討した。研究Ⅳでは、従来の問題解決モデルとの比較を行い、参加指向的アプローチの独自性と支援構造上の特徴を明らかにした。

第4章 研究方法

第4章では、参加指向的アプローチの有効性を検討するために用いた研究方法を示した。本研究は、多重事例研究の形式をとり、複数の領域と異なる実施者による支援過程を対象とした。対象としたのは、リハビリテーション領域（脳外傷、脳性まひ）および、心理療法領域（不登校、引きこもり、発達障害、知的障害）のクライアントである。いずれの事例においても、本人が望む生活像や価値に基づいて参加目標を設定し、その達成に向けた行動目標や支援プロセスを分析対象とした。

データ収集は、面接記録・行動観察・他職種や家族・学校関係者からの情報を含む支援記録を統合して行い、本人の語り・行動と環境要因を総合的に把握した。

分析には、再帰的テーマ分析（Braun & Clarke, 2006, 2019, 2021）を用いた。これは、質的データを段階的に整理し、主要なテーマを抽出する方法である。本研究では、特に「価値の明確化」「参加目標の具体性」「行動変容の要因」「支援者の関わり方」を分析上の観点とし、それぞれがどのように支援の成否に関連するのかを検討した。これにより、参加指向的アプローチがどのような条件でどのように機能するのかを、複数の観点から質的に検討することが可能となった。

倫理的配慮として、本研究は桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（第14034

号)。研究協力者には事前に十分な説明を行い、同意を得た。また、支援記録は個人が特定されないよう修正した。

第5章 参加指向的アプローチの適用事例と分析

第5章では、本研究で検討した12事例のうち、研究Ⅰ・Ⅱに該当する9事例を取り上げ、その効果と構造の特性を検討した。研究Ⅰ（リハビリテーション領域）では、脳外傷の事例1は「1人で生きられるようになりたい」という価値から、復学や就労などの参加目標を設定し、神経心理学的リハビリテーションを経て就職と自立生活を達成した。脳外傷の事例2は、従前の仕事への復帰が医学的理由で困難になったが、「乗り物が好き」という価値から、「乗り物に関わる仕事に就く」という新たな参加目標を見出し、資格取得などの新たな生活目標を自ら構築した。脳外傷の事例3は復学を参加目標として、リハビリテーション課題への動機づけが高まったが、元の学校への復学が難しいことを受け容れ、別の学校への転学という参加目標を本人主体で決定した。脳性まひの事例はリハビリテーション訓練への意欲が低下していたが、「人に喜んでもらいたい」という価値を美容関連の仕事に就きたいという参加目標に具体化することで、職業リハビリテーションに自ら申し込むなど、リハビリテーション訓練への積極的参加が回復した。

研究Ⅱ（心理療法領域）では、不登校・引きこもりや発達障害・知的障害の事例を検討した。不登校・引きこもりの高校生の事例は「人を喜ばせたい」という価値から表現活動に関わる進路を参加目標として挙げ、両親へのプレゼンテーションや説得を行って退学し、当該分野での活動とアルバイト生活を実現した後、別の課程の高校に再入学した。別の不登校の高校生の事例は「人の役に立ちたい」という価値から医療専門職をめざすという参加目標を見出し、計画的部分登校を進め、医療系大学に進学した。発達障害のある小学生の事例は、不適応行動について、その低減を一義的とせず、本人の価値観に沿った環境調整の結果、日常生活の適応が改善した。軽度知的障害・発達障害のある高校生の事例は、人前で話すことの困難を主訴として来談したが、対人応対を含む仕事に就きたいという参加目標を見出したことから、行動目標を対人場面での応対ができることとし、SSTで段階的に対人スキルを獲得し、最終的に福祉関連施設の接客業務に就労した。発達障害のある中学生の事例は、制服の着こなしへの拘りに伴う不適応行動について、「おしゃれに制服を着たい」という価値を尊重した支援を教師が行い、学校生活の安定を回復した。

以上の事例を通じて、参加指向的アプローチでは、本人の価値を基盤とした参加目標を明確化し、その実現に繋がる具体的な行動目標を構造化することで、行動変容がみられることが示された。また、本アプローチは、複数の心理職や教師等の異なる実施者によっても実施されており、支援構造として一定の共有可能性と汎用性が示唆された。

第6章 参加指向的アプローチの有効性に関する検討と従来モデルとの比較

第6章では、本アプローチの有効性を検討するため、価値と参加目標に沿った行動変容

がみられた事例とみられなかった事例の再帰的テーマ分析を行い、さらに問題解決モデルとの比較を通じて理論的・実践的差異を明確化した。

研究Ⅲでは、事例を行動変容がみられた事例とみられなかった事例に分類し、それらの要因を抽出した。行動変容がみられた事例では、参加目標が本人の価値や希望に基づき明確に設定されていたこと、具体的な行動目標が立てられ、支援者と本人の協働関係が良好に構築されていたことが挙げられた。具体的には、行動変容がみられた事例においては、参加目標が本人にとって価値があり、その目標達成への意欲が行動変容の動機づけとなっていた。一方、行動変容がみられなかった事例では、目標設定が表面的で本人の価値や希望が十分に反映されておらず、やや支援者主導での設定であったため、十分な行動変容が得られなかったことが示された。

研究Ⅳでは、参加指向的アプローチと問題解決モデル（主に CBT）を理論的に比較検討した。問題解決モデルは症状や不適応行動の軽減を主目標とすることが多く、支援者が問題の整理や対処法の検討を主導する傾向がある。一方、参加指向的アプローチでは、本人の望む生活や実生活への関与の実現を直接の目標とし、本人が自らの価値観や生活歴をもとに目標を設定するため、本人の主体性や自己決定を反映しやすい。このため、症状や問題の軽減を必ずしも前提とせずとも、参加目標の達成に向けた支援を構成しうることが示された。また、参加目標が明確に定義されることで、支援プロセスの方向性を共有しやすくなり、支援の効果を参加や生活文脈を含む広い水準で捉えやすくなること、さらに、その効果が行動変容に結びつく可能性が示唆された。

以上の再帰的テーマ分析と比較検討を通じ、参加指向的アプローチは、症状や不適応状態の改善とは別に、参加目標の達成や生活の質の向上という視点での心理学的支援を提供し、従来の問題解決モデルを補完し得る選択肢として位置づけられた。

第7章 参加指向的アプローチの理論的再評価

第7章では、研究Ⅰ～Ⅳの知見を踏まえて参加指向的アプローチの枠組みを理論面から再評価し、既存アプローチとの関係と位置づけを再整理した。行動変容がみられた事例とみられなかった事例の照合から、価値→参加→活動の階層的連鎖が実生活への関与を前進させる一方、その持続には自己決定を支える関係性と環境調整が不可欠であることをまず確認した。

7.1 では、研究Ⅲのテーマ分析で得られた条件を再提示した。具体的には、①価値の内在化、②参加目標の具体性、③本人の自己決定と合意形成、④環境調整の併用が、行動変容の共通要因であった。逆に、価値の語りが一時的・表層的で、目標設定が支援者主導になると、行動変容に結び付きにくいことが示唆された。

7.2 では、GOA の理論的独自性と、参加指向的アプローチへの寄与を位置づけた。GOA は、参加を最上位とする階層構造を有し、上位目標からの逆向き設計により活動・心身機能を位置づける。この構造が、参加を起点とした目標設計を可能にし、ICF との親和性を高

める基礎となる。

7.3 では、参加指向的アプローチの理論的貢献として、問題解決モデルに対し「価値」の明示化と「参加」の階層的構造化を追加し、目標設定プロセスを可視化・一貫化する視点を示した。これにより、実施・評価・記述・多職種連携の構造化がしやすくなる。実践的意義としては、目標共有が自己効力感や内発的動機づけに繋がる可能性、および「参加」という文脈的な上位目標の設定が QOL 向上と行動変容に関連することを整理した。

7.4 では、心理療法の多数の理論・技法は、効果の捉え方や人間観が異なるため、単一理論による統合は困難であると述べた。しかし、多様性を前提とした柔軟な枠組みを構築する方向性に沿うなら、参加指向的アプローチは心理療法の「部分的統合」を検討するための枠組みとなる可能性を論じた。

7.5 では、主要な心理学的アプローチを「価値を基盤とする群」と「方法論を基盤とする群」に整理し、(1)価値の機能、(2)価値に基づく参加を上位目標として明示するか、(3)介入手続きの体系化、(4)効果指標、の4基準で比較した。その結果、いずれの群でも「価値→参加→活動」の階層構造が、体系としては十分に整備されておらず、この点を補完する枠組みとして参加指向的アプローチの意義を確認した。

7.6 では、臨床・教育・地域における支援などの領域間接続の観点から、参加を最上位に置く構造が、心理学的支援を実生活の関与に結びつけ、心理療法とソーシャルワーク、リハビリテーションの連携にも寄与することを示した。これにより、流派横断的な統合ではなく、共通の目標設計（価値→参加→活動）を媒介にした「部分的統合」の可能性が示唆される。

以上を総括すると、参加指向的アプローチは、事例分析で検証された条件（価値の内在化・目標の具体性・自己決定・環境調整）を土台とし、ICF の視点と GOA の階層構造を基盤としながら、目標設定と評価の共通枠組みを提供する理論となる。これは、問題の低減に着目しがちな従来の枠組みに対し、実生活への関与を直接の目標に据える第2のチャンネルを付与し、流派の多様性を保持したまま共通言語で協働できる可能性を開くものである。

第8章 結論と今後の展望

第8章では、本研究の成果を総括し、今後の検討課題を整理した。まず、ICF と GOA に基づき、価値を起点に参加を上位目標として明確化し、その達成経路を活動水準へ階層的に結び付ける参加指向的アプローチを提示した。本アプローチは、多様な心理学的技法を「参加目標の達成を支える手段」として位置づけ直すものであり、特定の技法に依存しない。これにより、問題や症状の低減に限定せず、本人が望む生活の実現へ支援の焦点を拡張できることを示した。

研究 I ～IV の知見から、参加指向的アプローチは、価値→参加→活動という設計により、臨床・教育・地域支援など多様な場面で柔軟に運用し得る。目標共有と階層構造の導入は、多職種間の協働や個別事例の柔軟な支援デザインを可能にする。

今後の理論的課題としては、①価値や参加目標が一時的な感情に左右されず維持・更新さ

れるように支える「内在化」の検討，②価値→参加→活動の各水準で何をどの段階で支援・評価するかという支援構造の明確化，③分類・測定 of 洗練が挙げられる。特に参加は頻度・範囲・主観的納得度，活動は頻度・持続・自立度などの指標を組み合わせ，環境調整は実施度を記録して前後比較できる形に整えるといった2層評価の設計が有効であると考えられる。

さらに，効果を継続的に確認する仕組みを整え，評価間隔・確認項目・見直し条件を予め定め，変更内容とその理由を記録し，本人の同意を確認しながら進めることは，自己決定を維持し，支援を柔軟かつ継続的に進めるうえで重要である。

実践的課題としては，①支援者の役割の明確化，②環境調整の系統的導入，③自己決定を保障する関係性の構築が挙げられる。

第9章 総合的結論

本研究で提示した参加指向的アプローチは，ICFとGOAに基づく「価値→参加→活動」の階層設計を核とし，心理学的支援を実生活への関与に接続する枠組みを示した。

研究Ⅰ～Ⅳの知見を総合すると，行動変容がみられた事例では価値の明確化と具体的な参加目標が維持され，取り組みが継続していた。一方，行動変容がみられなかった事例では価値と参加目標の内在化が進まず，自己決定を支える関係性と環境調整も十分ではなかったことが，行動変容が生じにくかった要因と考えられた。

結論として，参加指向的アプローチは，心理学的支援を生活モデルの視点から位置づけ直し，従来の問題解決モデルを補完・並走し得る選択肢の1つとして位置づけられる。多様な理論・技法の特長を尊重しつつ，共通の枠組みに基づく部分的統合の可能性を示唆した点に，本アプローチの理論的・実践的意義がある。

引用文献

- Adair, B., Ullenhag, A., Keen, D., Granlund, M., & Imms, C. (2015). The effect of interventions aimed at improving participation outcomes for children with disabilities: A systematic review. *Developmental Medicine & Child Neurology*, *57* (12) , 1093-1104. <https://doi.org/10.1111/dmcn.12809>
- Addis, M. E., & Martell, C. R. (2004). *Overcoming Depression One Step at a Time: The New Behavioral Activation Approach to Getting Your Life Back*. Oakland, CA: New Harbinger Publications.
- Allan, C. M., Campbell, W. N., Guptill, C. A., Stephenson, F. F., & Campbell, K. E. (2006). A conceptual model for interprofessional education: The International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF). *Journal of Interprofessional Care*, *20* (3) , 235–245. <https://doi.org/10.1080/13561820600718139>
- Baker, A., Cornwell, P., Gustafsson, L., Stewart, C., & Lannin, N. A. (2022). Developing tailored theoretically informed goal-setting interventions for rehabilitation services: A co-design approach. *BMC Health Services Research*, *22*, 811. <https://doi.org/10.1186/s12913-022-08047-6>
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: W. H. Freeman and Company.
- Baer, D. M., Wolf, M. M., & Risley, T. R. (1968). Some current dimensions of applied behavior analysis. *Journal of Applied Behavior Analysis*, *1*(1), 91–97. <https://doi.org/10.1901/jaba.1968.1-91>
- Beck, A. T. (1976). *Cognitive Therapy and the Emotional Disorders*. New York: International Universities Press. (ベック, A. T. 大野 裕 (訳) (1990). 認知療法 : 精神療法の新しい発展 東京 : 岩崎学術出版社)
- Berkout, O. V. (2022). Working with values: An overview of approaches and considerations in implementation. *Behavior Analysis in Practice*, *15*(1), 104–114. <https://doi.org/10.1007/s40617-021-00589-1>
- Bosch, S., & Fuqua, R. W. (2001). Behavioral cusps: A model for selecting target behaviors. *Journal of Applied Behavior Analysis*, *34* (1) , 123–125. <https://doi.org/10.1901/jaba.2001.34-123>
- Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology*, *3* (2) , 77–101. <https://doi.org/10.1191/1478088706qp063oa>
- Braun, V., & Clarke, V. (2019). Reflecting on reflexive thematic analysis. *Qualitative*

- Research in Sport, *Exercise and Health*, 11 (4) , 589–597.
<https://doi.org/10.1080/2159676X.2019.1628806>
- Braun, V., & Clarke, V. (2021). One size fits all? What counts as quality practice in (reflexive) thematic analysis? *Qualitative Research in Psychology*, 18 (3) , 328–352. <https://doi.org/10.1080/14780887.2020.1769238>
- Buntinx, W. H. E., & Schalock, R. L. (2010). Models of disability, quality of life, and individualized supports: Implications for professional practice in intellectual disability. *Journal of Policy and Practice in Intellectual Disabilities*, 7 (4) , 283–294. <https://doi.org/10.1111/j.1741-1130.2010.00278.x>
- Cerniauskaite, M., Quintas, R., Koutsogeorgou, E., Meucci, P., Sattin, D., Leonardi, M., & Raggi, A. (2012). Quality-of-life and disability in patients with stroke. *American Journal of Physical Medicine & Rehabilitation*, 91 (13 Suppl 1), S39–S47. <https://doi.org/10.1097/PHM.0b013e31823d4df7>
- Chandrasekar, A., Clark, S. E., Martin, S., Vanderslott, S., Flores, E. C., Aceituno, D., Barnett, P., Vindrola-Padros, C., & Vera San Juan, N. (2024). Making the most of big qualitative datasets: a living systematic review of analysis methods. *Frontiers in Big Data*, 7, 1455399. <https://doi.org/10.3389/fdata.2024.1455399>
- Chen, J. T.-H., Wuthrich, V. M., Rapee, R. M., Draper, B., Brodaty, H., Cutler, H., Low, L.-F., Georgiou, A., Johnco, C., Jones, M., Meuldijk, D., & Partington, A. (2022). Improving mental health and social participation outcomes in older adults with depression and anxiety: Study protocol for a randomised controlled trial. *PLOS ONE*, 17(6), e0269981. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0269981>
- Craig, P., Dieppe, P., Macintyre, S., Michie, S., Nazareth, I., & Petticrew, M. (2008). Developing and evaluating complex interventions: The new Medical Research Council guidance. *BMJ*, 337, a1655. <https://doi.org/10.1136/bmj.a1655>
- Crawford, L., Maxwell, J., Colquhoun, H., Kingsnorth, S., Fehlings, D., Zarshenas, S., McFarland, S., & Fayed, N. (2022). Facilitators and barriers to patient-centred goal-setting in rehabilitation: A scoping review. *Clinical Rehabilitation*, 36(12), 1694–1704. <https://doi.org/10.1177/02692155221121006>
- Cuijpers, P. (2019). Targets and outcomes of psychotherapies for mental disorders: An overview. *World Psychiatry*, 18(3), 276–285. <https://doi.org/10.1002/wps.20661>
- Dai, S.-C., Xiong, A., & Ku, L.-W. (2023). LLM-in-the-loop: Leveraging Large Language Model for Thematic Analysis. In H. Bouamor, J. Pino, & K. Bali (Eds.), *Findings of the Association for Computational Linguistics: EMNLP 2023*

- (pp. 9993–10001). Association for Computational Linguistics.
<https://doi.org/10.18653/v1/2023.findings-emnlp.669>
- de Shazer, S., Berg, I. K., Lipchik, E., Nunnally, E., Molnar, A., Gingerich, W., & Weiner-Davis, M. (1986). Brief therapy: Focused solution development. *Family Process*, *25*(2), 207–221. <https://doi.org/10.1111/j.1545-5300.1986.00207.x>
- Dozois, D. J. A., Dobson, K. S., & Rnic, K. (2019). Historical and philosophical bases of the cognitive-behavioral therapies. In K. S. Dobson & D. J. A. Dozois (Eds.), *Handbook of cognitive-behavioral therapies* (4th ed., pp. 3–31). New York: Guilford Press.
- D’Zurilla, T. J., & Nezu, A. M. (2007). *Problem-solving therapy: A positive approach to clinical intervention* (3rd ed.). New York, NY: Springer Publishing.
- Frankl, V. E. (1969). *The Will to Meaning: Foundations and Applications of Logotherapy*. New York: World Publishing Company. (フランクフル, V. E. 大沢 博 (訳) (1979). 意味への意志—ロゴセラピーの基礎と適用 東京: ブレーン出版)
- Frey Müller, N., Knoop, T., & Meyer-Feil, T. (2024). Social work practice and outcomes in rehabilitation: A scoping review. *Frontiers in Rehabilitation Sciences*, *5*, 1348294. <https://doi.org/10.3389/fresc.2024.1348294>
- Frisch, M. B. (1998). Quality of life therapy and assessment in health care. *Clinical Psychology: Science and Practice*, *5*(1), 19–40.
<https://doi.org/10.1111/j.1468-2850.1998.tb00132.x>
- Gaudiano, B. A. (2008). Cognitive-behavioral therapies: Achievements and challenges. *Evidence-Based Mental Health*, *11*(1), 5–7.
<https://doi.org/10.1136/ebmh.11.1.5>
- Germain, C. B. (1973). An ecological perspective in casework practice. *Social Casework*, *54* (6) , 323–330.
- Gitterman, A., & Germain, C. B. (2008). The life model of social work practice: *Advances in theory and practice* (3rd ed.). New York, NY: Columbia University Press.
- Granlund, M., & Imms, C. (2024). Participation as a means: Implications for intervention reasoning. *Frontiers in Rehabilitation Sciences*, *5*, Article 1399818.
<https://doi.org/10.3389/fresc.2024.1399818>
- Grant, A. M. (2003). The impact of life coaching on goal attainment, metacognition, and mental health. *Social Behavior and Personality*, *31*(3), 253–264.
<https://doi.org/10.2224/sbp.2003.31.3.253>
- Grant, A. M. (2006). An integrative goal-focused approach to executive coaching. In D. R. Stober & A. M. Grant (Eds.), *Evidence based coaching handbook: Putting*

- best practices to work for your clients* (pp. 153–192). New York: John Wiley & Sons.
- 袴田 俊一 (2011). ライフモデルを基盤とするソーシャルワークにおける心理的介入 : 認知療法と解決志向アプローチを中心に. *総合福祉科学研究*, 2, 25-34.
- Hammel, J., Magasi, S., Heinemann, A. W., Gray, D. B., Stark, S., Kisala, P., Carlozzi, N. E., Tulskey, D., Garcia, S. F., & Hahn, E. A. (2015). Environmental barriers and supports to everyday participation: A qualitative insider perspective from people with disabilities. *Archives of Physical Medicine and Rehabilitation*, 96 (4) , 578–588. <https://doi.org/10.1016/j.apmr.2014.12.008>
- Hayes, S. C., & Hofmann, S. G. (2021). “Third-wave” cognitive and behavioral therapies and the emergence of a process-based approach to intervention in psychiatry. *World Psychiatry*, 20(3), 363–375. <https://doi.org/10.1002/wps.20884>
- Hayes, S. C., Luoma, J. B., Bond, F. W., Masuda, A., & Lillis, J. (2006). Acceptance and Commitment Therapy: Model, processes and outcomes. *Behaviour Research and Therapy*, 44 (1) , 1–25. <https://doi.org/10.1016/j.brat.2005.06.006>
- Hayes, S. C., Strosahl, K. D., & Wilson, K. G. (1999). *Acceptance and Commitment Therapy: An experiential approach to behavior change*. New York: Guilford Press.
- Hayes, S. C., Strosahl, K. D., & Wilson, K. G. (2012). *Acceptance and commitment therapy: The process and practice of mindful change (2nd ed.)*. New York: Guilford Press. (ヘイズ, S. C.・ストローサル, K. D.・ウィルソン, K. G. 武藤 崇・三田村 仰・大月 友 (監訳) (2014). アクセプタンス&コミットメント・セラピー (ACT) 第2版—マインドフルな変化のためのプロセスと実践 東京: 星和書店)
- Hofmann, S. G., Asnaani, A., Vonk, I. J. J., Sawyer, A. T., & Fang, A. (2012). The efficacy of cognitive behavioral therapy: A review of meta-analyses. *Cognitive Therapy and Research*, 36 (5) , 427–440. <https://doi.org/10.1007/s10608-012-9476-1>
- Holliday, R. C., Ballinger, C., & Playford, E. D. (2007). Goal setting in neurological rehabilitation: patients' perspectives. *Disability and Rehabilitation*, 29 (5) , 389–394. <https://doi.org/10.1080/09638280600841117>
- 池淵 恵美 (2024). 精神障害の社会モデルと治療・支援への提言. *精神神経学雑誌*, 126(8), 499–509. <https://doi.org/10.57369/pnj.24-082>
- Imms, C., Granlund, M., Wilson, P. H., Steenbergen, B., Rosenbaum, P. L., & Gordon, A. M. (2017). Participation, both a means and an end: A conceptual analysis of processes and outcomes in childhood disability. *Developmental Medicine &*

- Child Neurology*, 59 (1) , 16–25. <https://doi.org/10.1111/dmcn.13237>
- 伊勢田 旭・小川 一夫・長谷川 憲一（編著）（2012）．生活臨床の基本——統合失調症患者の希望にこたえる支援—— 東京：日本評論社
- 石川 久展（2019）．わが国におけるマイクロ・メゾ・マクロソーシャルワーク実践の理論的枠組みに関する一考察——ピンカスとミナハンの4つのシステムを用いてのマイクロ・メゾ・マクロ実践モデルの体系化の試み——. *Human Welfare*, 11 (1) , 25–37.
- 石川 利江（監修・編著）・松田 チャップマン 与理子（編著）（2025）．コーチング心理学入門：ポジティブな支援の実践 東京：サイエンス社
- 川上 克樹・永井 喜子・久保 義郎（2016）．認知行動療法の目標設定におけるICFの活用（1）——認知リハビリテーションの事例——. 日本健康心理学会第29回大会発表論文集.
- Kazdin, A. E. (2008). Evidence-based treatment and practice: New opportunities to bridge clinical research and practice, enhance the knowledge base, and improve patient care. *American Psychologist*, 63 (3) , 146–159.
<https://doi.org/10.1037/0003-066X.63.3.146>
- Kazdin, A. E. (2012). *Behavior modification in applied settings*(7th ed.). Long Grove, IL: Waveland Press.
- Kiresuk, T. J., & Sherman, R. E. (1968). Goal attainment scaling: A general method for evaluating comprehensive community mental health programs. *Community Mental Health Journal*, 4(6), 443–453. <https://doi.org/10.1007/BF01530764>
- King, G., Law, M., King, S., Rosenbaum, P., Kertoy, M. K., & Young, N. L. (2003). A conceptual model of the factors affecting the recreation and leisure participation of children with disabilities. *Physical & Occupational Therapy in Pediatrics*, 23 (1) , 63–90. https://doi.org/10.1080/J006v23n01_05
- 今野 義孝（1977）．多動児の行動変容における腕あげ動作コントロール法の試み．日本心理学会第41回大会発表論文集，1098-1099.
- Kostanjsek N. (2011). Use of the International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) as a conceptual framework and common language for disability statistics and health information systems. *BMC Public Health*, 11(Suppl 4), S3. <https://doi.org/10.1186/1471-2458-11-S4-S3>
- 厚生労働省（2002）．「国際生活機能分類—国際障害分類改訂版—」（日本語版）の厚生労働省ホームページ掲載について。
<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/08/h0805-1.html>（2024年12月23日閲覧）
- 厚生労働省（2006）．社会保障審議会統計分科会生活機能分類専門委員会（第1回）参考資料．厚生労働省. <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/07/s0726-7.html>（2024

年 12 月 23 日閲覧)

- 久保 絃章・副田 あけみ (編) (2005) . ソーシャルワークの実践モデル——心理社会的アプローチからナラティブまで—— 東京：川島書店
- 久保 義郎 (2012). 器質精神障害・高次脳機能障害. 中島 俊樹・松井 博 (編), 60 のケースから学ぶ 認知行動療法の技法と臨床 (pp.154-158) 京都：北大路書房.
- 久保 義郎 (2015). 認知行動療法における国際生活機能分類 (ICF) の活用——「参加」レベルの目標設定による QOL の拡大——. 日本健康心理学会第 28 回大会発表論文集, 129.
- 久保 義郎 (2024). 行動療法・認知行動療法. 山口 加代子・上田 幸彦・久保 義郎 (編著), 最新リハビリテーション基礎講座 臨床心理学 (pp.164-178) 東京：医歯薬出版.
- 久保 義郎 (2025). 認知行動療法における「目標指向的アプローチ」の有効性——「参加」レベルの目標設定による QOL の向上——. 日本健康心理学会第 38 回大会発表論文集, P2: 57.
- 熊野 宏昭 (2019) . 認知行動療法とは. 日本認知・行動療法学会 (編) , 認知行動療法事典 (pp. 2-5) 東京：丸善出版
- Leahy, R. L. (2003). *Cognitive therapy techniques : A practitioner' s guide*. New York : Guilford Press.
- Leamy, M., Bird, V., Le Boutillier, C., Williams, J., & Slade, M. (2011). Conceptual framework for personal recovery in mental health: Systematic review and narrative synthesis. *The British Journal of Psychiatry, 199* (6) , 445-452. <https://doi.org/10.1192/bjp.bp.110.083733>
- Lee, V. V., van der Lubbe, S. C. C., Goh, L. H., & Valderas, J. M. (2024). Harnessing ChatGPT for thematic analysis: Are we ready? *Journal of Medical Internet Research, 26*, e54974. <https://doi.org/10.2196/54974>
- Leonardi, M., & Fheodoroff, K. (2021). Goal setting with ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health) and multidisciplinary team approach in stroke rehabilitation. In Platz, T. (Ed.). *Clinical pathways in stroke rehabilitation* (pp.35–56). Cham, Switzerland: Springer. https://doi.org/10.1007/978-3-030-58505-1_3
- Levack, W. M. M., Dean, S. G., Siegert, R. J., & McPherson, K. M. (2006). Purposes and mechanisms of goal planning in rehabilitation: The need for a critical distinction. *Disability and Rehabilitation, 28*(12), 741–749. <https://doi.org/10.1080/09638280500265961>
- Levack, W. M. M., Weatherall, M., Hay-Smith, E. J. C., Dean, S. G., McPherson, K., & Siegert, R. J. (2015). Goal setting and strategies to enhance goal pursuit for

- adults with acquired disability participating in rehabilitation. *Cochrane Database of Systematic Reviews*, 2015 (7) , CD009727.
<https://doi.org/10.1002/14651858.CD009727.pub2>
- Levitt, H. M., Bamberg, M., Creswell, J. W., Frost, D. M., Josselson, R., & Suárez-Orozco, C. (2018). Journal article reporting standards for qualitative primary, qualitative meta-analytic, and mixed methods research in psychology: The APA Publications and Communications Board task force report. *American Psychologist*, 73 (1) , 26-46. <https://doi.org/10.1037/amp0000151>
- Locke, E. A., & Latham, G. P. (2002). Building a practically useful theory of goal setting and task motivation: A 35-year odyssey. *American Psychologist*, 57(9), 705–717. <https://doi.org/10.1037/0003-066X.57.9.705>
- Malik, K., Ibrahim, M., Bernstein, A., Venkatesh, R. K., Rai, T., Chorpita, B., & Patel, V. (2021). Behavioral activation as an ‘active ingredient’ of interventions addressing depression and anxiety among young people: A systematic review and evidence synthesis. *BMC Psychology*, 9, Article 150. <https://doi.org/10.1186/s40359-021-00655-x>
- Martell, C. R., Dimidjian, S., & Herman-Dunn, R. (2022). *Behavioral Activation for Depression: A Clinician’s Guide*. (2nd ed.). New York: Guilford Press.
- Maslow, A. H. (1962). *Toward a Psychology of Being* (2nd ed. 1968). New York: Van Nostrand Company. (マズロー, A. H. 上田 吉一 (訳) (1998). 完全なる人間—魂のめざすもの 東京：誠信書房)
- May, R. (1981). *Freedom and Destiny*. New York: Norton. (メイ, R. 伊東 博・伊東 順子 (共訳) (1988). 自由と運命 東京：誠信書房)
- 宮田 広善 (2001). 子育てを支える療育——〈医療モデル〉から〈生活モデル〉への転換を—— 東京：ぶどう社
- 茂木 俊彦 (2012). 子どもに学んで語りあう 東京：全国障害者問題研究会出版部
- 森田 正馬 (2004). 神経質の本態と療法——森田療法を理解する必読の原典—— 東京：白揚社 (原著 1919)
- 永井 喜子・川上 克樹・久保 義郎 (2016). 認知行動療法の目標設定における ICF の活用 (2) ——チームリハビリテーションにおける事例——. 日本健康心理学会第 29 回大会発表論文集.
- 成瀬 悟策 (1973). 心理リハビリテーション——脳性マヒ児の動作と訓練—— 東京：誠信書房
- 成瀬 悟策 (1992). 臨床動作法の心理構造. 成瀬 悟策 (編) 臨床動作法の理論と治療 (pp. 43-52) 東京：至文堂.
- Nguyen-Trung, K. (2025). ChatGPT in thematic analysis: Can AI become a research

- assistant in qualitative research? *Quality & Quantity*, 59, 4945–4978.
<https://doi.org/10.1007/s11135-025-02165-z>
- 西山 志満子 (2018). ARMS CBT における治療のポイント. 予防精神医学, 3 (1), 20–30. https://doi.org/10.24591/jseip.3.1_20
- Norcross, J. C., & Goldfried, M. R. (Eds.). (2019). *Handbook of psychotherapy integration* (3rd ed.). New York: Oxford University Press.
- Nowell, L. S., Norris, J. M., White, D. E., & Moules, N. J. (2017). Thematic analysis: Striving to meet the trustworthiness criteria. *International Journal of Qualitative Methods*, 16 (1), 1–13. <https://doi.org/10.1177/1609406917733847>
- 岡田 佳詠・川野 直久・田上 博喜・泉 武康・小野 俊一・水野 恵三子・中村 聡美 (2022). 気分障害への多職種連携チームによる認知行動療法. 認知療法研究, 15 (2), 123–132.
- 岡 美智代・石川 純子・上星 浩子・松本 光寛・高橋 さつき・伊藤 美鈴 (2022). Virginia Braun and Victoria Clarke による再帰的テーマティック分析を中心としたテーマティック分析の概要と分析プロセス. 日本看護研究学会雑誌, 45 (2), 145–158.
- 大川 弥生 (2002). 理学療法に生かす ICF (5) 理学療法プログラムに生かす ICF (1) 目標指向的アプローチ. 理学療法ジャーナル, 36 (8), 609–615.
- 大川 弥生 (2003). 生活機能 (functioning) 向上にむけたリハビリテーション: 目標指向的プログラムにたつて, 日本老年医学会雑誌, 40 (6), 582–585.
- 大川 弥生・上田 敏 (1996) 高次脳機能障害に対する医学的リハビリテーション. リハビリテーション研究, (87), 6–13.
- 大野 清志 (1974). 乱暴・けんか・反抗. 沢田 慶輔・内山 喜久雄・間宮 武 (編著) 最新生徒指導シリーズ 4 問題行動の指導 東京: 日本図書文化協会, pp.134–141.
- Passmore, J. & Fillery-Travis, A. (2011). A critical review of executive coaching research: A decade of progress and what's to come. *Coaching: An International Journal of Theory, Practice & Research*. 4 (2), 70–88.
<https://doi.org/10.1080/17521882.2011.596484>
- Perlman, H. H. (1957). *Social casework: A problem-solving process*. Chicago : University of Chicago Press. (パールマン, H. H. 松本 武子 (訳), 1966. ソーシャル・ケースワーク : 問題解決の過程 [改訳版] 東京: 全国社会福祉協議会)
- Persons, J. B. (2008). *The case formulation approach to cognitive-behavior therapy*. New York: Guilford Press. (パーソンズ, J. B. 坂野 雄二・本谷 亮 (監訳) (2021). 認知行動療法ケース・フォーミュレーション 東京: 金剛出版.)
- Pollock, N., Law, M., Baptiste, S., McColl, M. A., Opzoomer, A., & Polatajko, H. (1990). Occupational performance measures: A review based on the guidelines for client-centred practice of occupational therapy. *Canadian Journal of*

- Occupational Therapy*, 57 (2), 77–81.
<https://doi.org/10.1177/000841749005700206>
- Rahal, G. M., & Caserta Gon, M. C. (2020). A systematic review of values interventions in acceptance and commitment therapy. *International Journal of Psychology and Psychological Therapy*, 20(3), 355–372.
- Rice, D. B., McIntyre, A., Mirkowski, M., Janzen, S., Viana, R., Britt, E., & Teasell, R. (2017). Patient-centered goal-setting in a hospital-based outpatient stroke rehabilitation center. *PM&R*, 9 (9) , 856–865.
<https://doi.org/10.1016/j.pmrj.2016.12.004>
- Rogers, C. R. (1951). *Client-Centered Therapy: Its Current Practice, Implications and Theory*. Boston: Houghton Mifflin.–
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21(2), 95–103.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55 (1) , 68–78.
- Ryff, C. D., & Singer, B. (2008). Know thyself and become what you are : A eudaimonic approach to psychological well-being. *Journal of Happiness Studies*, 9(1), 13–39. <https://doi.org/10.1007/s10902-006-9019-0>
- 坂野 朝子・武藤 崇 (2012) . 「価値」の機能とは何か：実証に基づく価値研究についての展望. *心理臨床科学*, 2 (1), 69-80.
<https://pscenter.doshisha.ac.jp/journal/PDF/Vol2/p69-.pdf>
- 坂野 雄二 (1995) . 認知行動療法 東京：日本評論社
- Schwartz, I. S., & Kelly, E. M. (2021). Quality of Life for People with Disabilities: Why Applied Behavior Analysts Should Consider This a Primary Dependent Variable. *Research and Practice for Persons with Severe Disabilities*, 46 (3) , 159–172. <https://doi.org/10.1177/15407969211033629>
- 瀬口 篤史 (2020). 加害恐怖を示す高齢女性に曝露反応妨害法を行った単一事例研究——買い物行動に対する介入と効果の検討——. *行動分析学研究*, 35(1), 52-60.
https://doi.org/10.24456/jjba.35.1_52
- 嶋 大樹・井上 和哉・本田 暉・高橋 まどか (2023). 外来臨床における標的行動選定プロセスとその特徴の記述に向けた系統的レビュー. *認知行動療法研究*, 49 (2), 63-74.
- Siegert, R. J., & Levack, W. M. M. (Eds.). (2014). *Rehabilitation Goal Setting: Theory, Practice and Evidence*. London: CRC Press.
<https://doi.org/10.1201/b17166>

- Simeonsson, R. J., Leonardi, M., Bjorck-Akesson, E., Hollenweger, J., Lollar, D., Martinuzzi, A., McDowell, B., & Mpofu, E. (2003). Applying the International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) to measure childhood disability. *Disability and Rehabilitation*, *25* (11-12) , 602-610.
<https://doi.org/10.1080/0963828031000137117>
- Simon, L., Gölz, F., Schenk, O., Bührmann, T., Kauff, M., Kraus de Camargo, O., Snyman, S., Lüers, G., & Wulfhorst, B. (2024). The international classification of functioning, disability and health in clinical practice, research findings and their impact on training and education. *Frontiers in Rehabilitation Sciences*, *5*, 1420498. <https://doi.org/10.3389/fresc.2024.1420498>
- Skinner, B. F. (1953). *Science and human behavior*. New York: The Macmillan Company.
<https://www.bfskinner.org/newtestsite/wp-content/uploads/2014/02/ScienceHumanBehavior.pdf>
- Skoumal, M., Lindner-Rabl, S., Honegger, M., Pertinatsch, C., Kadane, C., Neubacher, B., Herzog, C., & Roller-Wirnsberger, R. (2024). Goal setting for participatory person-centered geriatric rehabilitation—From function-centered rehabilitation towards digitally supported personalized and integrated care for older people. *Journal of Clinical Medicine*, *13* (14) , 4134.
<https://doi.org/10.3390/jcm13144134>
- 砂原 茂一 (1980) . リハビリテーション 東京：岩波書店
- Syed, M., & Westberg, D. W. (2025). Mixed-methods research in psychology: Rationales and research designs. *Advances in Methods and Practices in Psychological Science*, *8* (2) , 1-16. <https://doi.org/10.1177/25152459251343919>
- 武内 智弥 (2017) . 臨床動作学における方法と理論の変遷について. 青山学院大学教育人間科学部紀要, *8*, 121-135.
- 土屋 雅子 (2016) . テーマティック・アナリシス法：インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎 京都：ナカニシヤ出版
- 津田 耕一 (2003) . ソーシャルワークにみる行動療法アプローチの意義. 行動療法研究, *29* (2), 119-132.
- Tunç, H., Morris, P. G., Kyranides, M. N., McArdle, A., McConachie, D., & Williams, J. (2023). The relationships between valued living and depression and anxiety: A systematic review, meta-analysis, and meta-regression. *Journal of Contextual Behavioral Science*, *28*, 102–126. <https://doi.org/10.1016/j.jcbs.2023.02.004>
- 上田 敏 (1983) . リハビリテーションを考える——障害者の全人間的復権—— 東京：青木書店

- 上田 敏 (1992a). リハビリテーション医学の世界 東京：三輪書店
- 上田 敏 (1992b). ゴール設定をどう考えるか——目標指向的アプローチを中心に——. 理学療法ジャーナル, 26 (7), 432-435.
- 上田 敏 (2005). ICF の理解と活用：人が「生きること」「生きることの困難（障害）」をどうとらえるか 東京：きょうされん, 東京：萌文社（発売）
- Ueda, S., & Okawa, Y. (2003). The subjective dimension of functioning and disability: What is it and what is it for? *Disability and Rehabilitation*, 25(11-12), 596–601. <https://doi.org/10.1080/0963828031000137108>
- Wachtel, P. L., Siegel, J. P., & Baer, J. C. (2020). The scope of psychotherapy integration: Introduction to a special issue. *Clinical Social Work Journal*, 48(3), 231-235. <https://doi.org/10.1007/s10615-020-00771-y>
- White, M., & Epston, D. (1990). *Narrative means to therapeutic ends*. New York : W. W. Norton & Company. (ホワイト, M. & エプストン, D. 小森 康永 (訳) (2017). 物語としての家族 [新訳版] 東京：金剛出版)
- Whiteneck, G., & Dijkers, M. P. (2009). Difficult to measure constructs: Conceptual and methodological issues concerning participation and environmental factors. *Archives of Physical Medicine and Rehabilitation*, 90(11 Suppl), S22–S35. <https://doi.org/10.1016/j.apmr.2009.06.009>
- Widnall, E., Price, A., Trompetter, H., & Dunn, B. D. (2020). Routine cognitive behavioural therapy for anxiety and depression is more effective at repairing symptoms of psychopathology than enhancing wellbeing. *Cognitive Therapy and Research*, 44, 28–39. <https://doi.org/10.1007/s10608-019-10041-y>
- Wiggins, G., & McTighe, J. (2005). *Understanding by design* (Expanded 2nd ed.). Alexandria, VA : Association for Supervision and Curriculum Development.
- Wilson, K. G., & Murrell, A. R. (2004). Values work in Acceptance and Commitment Therapy: Setting a course for behavioral treatment. In S. C. Hayes, V. M. Follette, & M. M. Linehan (Eds.), *Mindfulness and acceptance: Expanding the cognitive-behavioral tradition* (pp. 120-151). New York: Guilford Press.
- World Health Organization (2001). *International Classification of Functioning, Disability and Health(ICF)*. Geneva: World Health Organization. (世界保健機関 (著), 障害者福祉研究会 (編) (2002) . ICF 国際生活機能分類——国際障害分類改定版—— 東京：中央法規出版)
- World Health Organization (2013). *How to use the ICF: A practical manual for using the International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF)*. Exposure draft for comment. Geneva: World Health Organization. <https://www.who.int/publications/m/item/how-to-use-the-icf--a-practical-man>

ual-for-using-the-international-classification-of-functioning-disability-and-he
alth

Yalom, I. D. (1980). *Existential Psychotherapy*. New York: Basic Books.

山上 敏子 (1990) . 行動療法展望——生活への寄与——行動療法研究, 16 (1) , 1-12.

Zarbo, C., Tasca, G. A., Cattafi, F., & Compare, A. (2016). Integrative psychotherapy works. *Frontiers in Psychology*, 6, 2021.

<https://doi.org/10.3389/fpsyg.2015.02021>